

〈指導記録〉「青い空コンサート」

アンサンブル演奏の指導についての報告

井 中 あ け み

はじめに

幼児教育・保育科の「青い空コンサート」は16年度も多くの観客の方に恵まれて盛大に行うことができた。この「青い空コンサート」はミュージカル、和太鼓、音楽と3つのプログラムが組み込まれており、学生（幼児教育・保育科2年生）にとっては誠に多忙なスケジュールの中で消化しなければならない実践学習の発表の場である。音楽、美術、舞踊、演劇など様々な実技の能力を発揮しなければならないこのイベントは、現場教育にもっとも密接した内容であり、この経験が現場で実際に活用できるよう体験していくことは各学生にとって大変貴重な蓄えとなるはずである。そのプログラムの中の1つである「音楽発表」を学習することは、幼児達が音楽を通して学んでいく知的能力や社会性、人間関係におけるコミュニケーションなどに深い関わりを持つものと考えている。本年度もその音楽の中の「アンサンブル演奏」の学習過程の経過観察をここに記録し、どのように最終発表を行っていったかをここに報告する。また幼児教育の音楽指導の在り方についても考察できるよう詳細に指導過程を記載していきたい。

1. 一般音楽指導の中の「アンサンブル演奏」の意義

幼児教育・保育科において音楽の指導を行う際、問題となることは、学生の実技レベル（特にピアノ）が高度なものでないことであろう。ピアノの単位修得のための実技テストや、就職試験の指定曲のためのテクニックの向上を意識した練習を繰り返し行う日々は、それを不得意とする学生にとってかなりの精神的負担を負うものであろう。またそれは学生によっては、音楽嫌いの原因を作ってしまう場合もある。

本来感情表現の大変豊かな幼児達の音楽教育を行うためには、教師自身が幅広い音楽経験を持っているべきである。保育士や幼稚園教諭にとってピアノが大変重要であることは言うまでもないが、たとえばピアノだけでなくピアノ以外の楽器演奏を学習の中に取り入れていくことは、幼児音楽教育にとって大変意味のあることではなかろうか。それぞれが個々の興味のある楽器を選択し学んでいくことは、色々な角度から音楽を眺めることができ、またピアノ嫌いのために音楽を拒否するという学生の割合が減少することも、過去のデータから明

らかとなっている。ピアノが大変得意の学生はさらにそこでピアノ実技能力を發揮し、高度なピアノ演奏技術を身に付けていく機会にも恵まれる。つまり音楽的レベルの高い学生にとっても低い学生にとっても成果が期待できるものである。特に例年男子学生についてはピアノ実技の高い学生を期待することはできず、そのレベルについては就職試験を含めて問題にすべき点の一つとなっている。しかしながら彼らはギターやドラムといった楽器の演奏には、興味とある程度の技術を持っていたりする場合がある。2年間の学生生活で本来ピアノ以外で興味があった音楽の腕前を、人前で披露したり、挑戦したりという機会は持つべき価値が十分あると考えられる。そこから男子学生らしい音楽教育が広がっていくことも十分に考えられまた期待するものである。さらに、このようなポジティブな感覚を持ちながら、楽器による「アンサンブル演奏」を行うことは、仲間との作品を作り上げることの一体感を経験し、そこで育まれる人とのコミュニケーションを大切にし、自分自身に対する責任感などを自然と意識するようになる。

このような音楽学習の方法によりそれぞれの作品を完成させ、発表の場を設けることは、学生達自身の達成感や、その経験による自信が幼児の教育現場においても十分生かされていくものとする。

その意味からもこのアンサンブル演奏を授業の一環として実施していくことは、大変価値のあることではないであろうか。

2. 「青い空コンサート」(音楽Ⅱ) における概要

① 選択授業

音楽Ⅱの授業は合唱と楽器(アンサンブル演奏)とに分け、学生自身がそれぞれを選択、希望する。またこの2つの授業は最後の1か月間で合同授業となり、「青い空コンサート」の音楽全体のプログラムを構成する。

② 授業におけるそれぞれの練習方法

1. 人数と時間配分

A 合唱について

合唱を希望した学生は前期の期間を主に発声練習に費やし、馴染みのある小規模な曲を使って2部合唱をした。1クラスを約10人から15人ぐらいとし、1コマを45分ずつに分けた少人数レッスンで歌唱指導を行った。

B 楽器(アンサンブル)

楽器を希望した学生については、レベルチェックを行うため、授業開講時にオーディションを行った。オーディションにおける受験曲、受験楽器は各自の得意とするもので、特に規定はなくそれぞれの持ち味が十分アピールできるよう配慮することを指摘した。結果38人の受験者(男子学生6名を含む)で入学以来初めての彼ら独自の演奏を披露するところとなった。オーディションの内容は大まかに次のようである。

オーディション内容

	楽 器	曲 目
A (1名)	ピアノ	バッハインベンション
B (2名)	歌	歌謡曲
C (2名)	歌とギター (男子2名)	歌謡曲
D (2名)	歌とピアノ	歌謡曲
E (1名)	ピアノ	ショパンワルツ
F (1名)	エレキギター (男子)	歌謡曲
G (3名)	リコーダー・ピアニカ (2)	童謡曲
H (1名)	琴	琴曲
I (1名)	三味線	三味線曲
J (1名)	ピアノ (男子)	オリジナル曲
K (1名)	電子オルガン	ジブリ曲
L (2名)	トランペット (2)	ディズニール曲
M (2名)	フルート・ピアノ	唱歌
N (1名)	トロンボーン	アメリカ民謡
O (1名)	トランペット	ジブリ曲
P (1名)	クラリネット	アメリカ民謡
Q (1名)	フルート	ディズニール曲
R (1名)	ベースギター (男子)	歌謡曲
S (1名)	オーボエ	歌謡曲
T (1名)	クラリネット	アメリカ民謡
U (1名)	トランペット	ディズニール曲
V (2名)	ピアノ連弾	ディズニール曲
W (2名)	ベースギター・歌	歌謡曲
X (2名)	木琴・電子オルガン	ジブリ曲
Y (1名)	太鼓	和太鼓のリズム
Z (1名)	ドラム (男子)	ディズニール曲
a (2名)	鉄琴・ピアノ	童謡曲

上記の表からも判るように、今年度においては非常に様々な楽器の種類があり、しかも和と洋があり近年の音楽カリキュラムに即した楽器の種類と言えよう。

オーディションの結果、2名の辞退者で36名の合格となった（不合格者なし）。クラスの人数は1クラス5名から8名という少人数編成で始まった。時間は合唱の授業と同時進行の45分を1コマとし、全部で6クラスの少人数アンサンブル指導を行う授業である。

2. 各授業形態

A 合唱（声楽講師担当）

ボイストレーニング（発声のための体操など）から始まり、前期は発声練習に主な重点を置き、その中で簡易な合唱曲を用い二部合唱の基礎を学習した。また後期（9月以降）からは「青い空」コンサートの曲に取り組んだ。（声楽講師の報告による）

B アンサンブル

① 面接

実際の練習に入る前に、アンサンブルの意味や意義、構造など基本的なものから学習する必要があることから、まずオーディションを受けた動機や目標など個々の再調査を行い細かく情報収集を行った。

〈結果〉

動機・目標など

- 高校時代に吹奏楽をやっていた。
- 昨年の先輩達の楽器演奏に憧れた。
- やり始めている楽器を、発表の場にしたい。
- 人の前に立って目立ちたい。
- 仲間と1つのものを作りたい。
- ピアノ以外の楽器に挑戦したい。
- 何かを作り上げるためならば、どんな努力もしたい。
- 音楽の喜びや楽しさをいろんな楽器を使って表現したい。
- とにかく「私」だけができる「出番」というものを持ちたい。

などの志望動機が挙げられた。

これらの中に共通して挙げられることは、自分という一個人が団体の中で、大切な一員であることを実感したい気持ちや、自分もやればできるという達成感を仲間と共に味わい、仲間にも認められ、共有していたいという願望がみられるということである。

また、面接の態度自体も、自分自身の主張をしっかりと行い、どれも意欲と希望に満ち溢れており、この調査では、ピアノの試験や練習に対する面持ちの時とは性質が違い、仲間と何かを作り上げていくことに対する期待や、未知の可能性に対しての前向きな姿勢が印象的であった。

② クラスについて

1クラス平均5～6人の人数編成で、1クラス45分で6クラスに分かれて授業を行う。

③ 楽器の担当について

今年度の場合、すでに自分の楽器を所持し、担当の楽器が決まっている学生が3分の2をしめており、特に金管、木管楽器については吹奏楽経験者などが大多数であった。また男子学生は一般的にギターやドラムなどに興味が集中することもあり、ベースギターやエレキギター、ドラムなどの楽器を希望通り取り入れた。ここで問題となるのは、全くピアノ以外の楽器（ピアノも上手ではない）の演奏ができない学生についてである。

この過程については以後順に述べていくこととする。

④ 初めてのアンサンブル練習

前期の授業は、アンサンブルという音楽の形態を知る準備段階であり、そのための教材は一般的によく知られている曲やなじみ易い曲でそれぞれ練習を行った。個人での演奏は日頃ピアノのテストなどで経験しているが、仲間と共に1つの曲を演奏するという形は未経験者が半数をしめていた。従ってそれを行うことの新鮮さと興味の度合いは学生にとって十分なものと言えよう。

またここではアンサンブル学習の初期第一段階として、以下のことを認識させた。

〈アンサンブル授業のねらい〉

- 個人の演奏技術だけでなく人との調和や協調性が必要であることを学ぶ。
- メロディーや伴奏をそれぞれの楽器が担当し合い、色々な演奏方法で表現することを経験する。
- リズム楽器を使用しながらの音楽表現の仕方を感じ取る。

上記のような点に注意しながら、保育の現場で指導者としての立場に立った時のことまでを考慮し、学習及び練習を行うよう指導した。

⑤ ソロ（独奏・独唱）の取り入れについて

幼児教育科や保育科などを専攻する学生は、当然のことながらほとんどの場合、一部の学生を除いて、高い演奏能力や技術を望むことはできない。しかしながら保育の現場では日常的に音楽の取り入れは当然のことであり、一般的に歌唱・合奏は欠かすことの出来ないカリキュラムとなっている。その意味からも「青い空コンサート」での練習過程や発表を体験することは、大変貴重なものであると考える。またそこでは学生自体のレベルは大して問題ではない。しかし、稀に見る、技術レベルの比較的高い一部の学生にとってみれば、自分の能力を最大限に伸ばすことは当然望んで止まないことである。そこでこの「青い空コンサート」の音楽発表の場に於いて、演奏の中にいくつかの「ソロ」の場面を組み込ませ、それぞれの得意分野を披露できるような編曲を試みた。このことによりレベルの比較的高い学生も、個人のレベルアップに挑戦することが可能となった。

この時点で心配された「ソロ」に対する「やっかみ」や「嫉妬」などは、皆無であり、むしろそれを憧れ、美しいと思う気持ちや賞賛する態度が学生同士にみられた。ここでは彼らは音楽的個性というものが、時として人を感動させるものであることを体得しており、学生同士がよい刺激を与え合うことが出来たように見受けられた。

⑥ 演奏レベルの低い学生の担当楽器について

幼児教育・保育科の稀に見る演奏技術レベルの高い学生が、「能力をいかに伸ばすか」という問題点と同じく、演奏技術レベルの低い学生にとっても悩みはさらに大きいものと言えよう。しかしながらその中でもこのアンサンブルの授業を希望し、乏しい演奏技術でオーディションを受けた学生は、何らかの音楽に対する強い意思を持っているのではないかと考えられる。彼らは何をしても納得の行かない結果となってしまうことが

最大の難点であるが、そのような色々な弱点を考慮した末、適役と考えられるのは、簡易リズム楽器となる。これらの楽器（タンブリン、カスタネット、すず、トライアングル、ウッドブロックなど）は簡単なリズムで表現可能であるが、大変に注目を浴びる種類の音色でもある。また正確性に富んでいなくてはならず、彼らにとってみれば「簡易」と呼ぶことはできない注意すべき楽器なのである。それにもかかわらず、簡易楽器に対しての「見た目」のマイナスの先入観だけは持ち合わせている。そこでまず彼らに簡易楽器の重要性や必要性を十分理解させることから始めてみた。つまり派手な音のする所謂「カッコイイ楽器」が大多数を占める中、足元にも及ばない自分がどう簡易楽器で演奏していけばよいのか、自分の役割は何であるのかを把握することは、その楽器の持つ特性やその曲に対しての効果などを自覚と責任を持って担当できると考えたからである。また簡易リズム楽器は保育現場では最も重要且つ必要な楽器であり、それらの楽器を担当し発表した学生が自信と誇りを持つことを願うばかりである。

3. 「青い空コンサート」曲目選択について

「青い空コンサート」は、地域の高齢者の方から幼稚園や保育園などの子供達まで、また学生達の家族や卒業生などが主な観客である。我々はそれらの方々にそれぞれ楽しんで頂ける曲を選択しなくてはならない。また学生達自体の2年間に及ぶ卒業発表とも考えられる催しであることから、学生達の達成感の得られるような曲も十分考慮しなければならない。これらの条件を全て整えるには、かなりの無理が生じ、曲目決定に困難を来した。演奏側と聴衆側の意向は必ずしも一致するものではなく、ましてや音楽専門家の演奏やプロの演奏会とは異質のものであり、どこにポイントを置くかが問われることとなる。

それらの問題点を考慮しながら、色々な意見や話し合いを学生達のそれぞれのグループによって行い、テーマは「歌いつないでいきたい曲」とし、結果選択された曲目は以下のようであった。

- | | |
|------------|-----------------------------|
| アニメ曲 | ミッキーマウスマーチ |
| (幼児対象) | さんぽ |
| | 鉄腕アトム |
| | カントリーロード |
| | 君をのせて |
| わらべ唄 | 花いちもんめ |
| (全年齢対象) | 三つのわらべうた |
| | (ずいずいずっころばし、通りゃんせ、あんたがたどこさ) |
| 民謡等 | さくら |
| (学生以上対象) | 木曾節 |
| | 島唄 |

唱歌・童謡…………… 犬のおまわりさん

（全年齢対象） 赤とんぼ
ゆ き
ふるさと

以上のように大きく4つに分類し、時代を超えて歌われるもの、聴かれるもの、次の世代に歌いつないでいかれると思うものなど日本の伝統として残していきたいものを選択した。アニメ曲に関しては、学生達の情報や感覚が長けており、彼らの感性をそのまま取り入れることにより曲を決定した。わらべ唄や民謡等に関しては、指導者の助言・情報提供により、聞いたことのある曲や興味のある曲から選択した。最後の唱歌・童謡は「NHKの聞きたい曲ベスト～」などの統計からも窺えるように、心に残る曲を意識し選曲を行った。

これらの曲目を見てみると、アニメを除く他の3つのセクションは、成人以上の年齢であれば誰もがどこかで聞き覚えのある曲と感ずることが出来るものばかりである。また聞いたことのない曲であっても、曲の印象づけによって日本の伝統や地方の特徴を心地よく受け取ることのできる編曲のものを注意して選曲しているの、印象に関しても期待できるものである。また今回は「琴」や「和太鼓」などの和楽器を演奏する学生が数名いたことから、それを十分に生かすよう試みた。さらにそれらの編曲の工夫によって幼児の記憶の中にも留まることのできる曲があるのではないだろうか。つまり現段階において全く受け入れられない音楽であっても、胎教音楽等の学説と同様、これらの楽曲を情操教育の一環として考えることは決して無駄な試みではないであろう。

このようなプログラムを決定し学生達はそれぞれ担当の楽器の個人練習や「合わせ」の練習を始めた。幸いにもこれらの曲に大変興味深い反応を示し、グループ内の人間関係も穏やかに保たれており、大きなトラブルもなく曲の練習に入ることができた。曲目は1グループがほぼ2曲ずつを担当し、楽器の種類によっては個人的に他のグループに出演して、プログラム全体に臨機応変に対応していった。

4. 各曲の構成

合唱とアンサンブルの授業は別々で同時進行の形をとって行っているが、最終段階ではこれを1つのものとして仕上げる。また一曲一曲の構成は以下の通りである。

アニメ……………① ミッキーマウスマーチ（楽器演奏）

オープニングらしく華やかに行進を行いながら演奏する。

[トランペット4, トロンボーン, フルート, クラリネット, オーボエ, 小太鼓, タンブリン, ドラム, ベースギター, ピアノ, アコーディオン, 指揮者]

② ジブリメドレー

1. カントリーロード（3人の斉唱とオカリナ）

比較的よく知られているメロディーの部分のみを演奏し、次の曲

に移る。

[ピアノ伴奏]

2. 君をのせて (合唱)

二部合唱に楽器のオブリガート付き。ピアノ2台に電子オルガンでオーケストラ風の伴奏を行う。

[ピアノ2台, 電子オルガン, クラリネット, アルトサックス, フルート]

3. さんぼ (合唱の手話付きと楽器演奏)

斉唱と楽器演奏で手話を付けて歌う。楽器と合唱が同等のバランスで演奏されており、聴衆がよく知っている曲であることから、手話が中心となるように手話のふりに注意する。

[ピアノ2台, 木琴, トランペット2本, 打楽器(タンブリン, すず, トライアングル, ウッドブロック, 電子オルガン)]

4. 鉄腕アトム (アンサンブル楽器演奏)

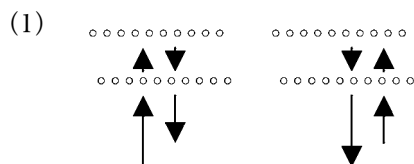
学生達の親の世代から今日まで手塚治虫の世界はアニメによって夢を与え続けてきたと言っても過言ではなかろう。

その意味からもこの鉄腕アトムは幼児達にも受け入れられるはずであろう。アニメの最後を飾るのにふさわしい曲と考え、選択した。はっきりとしたトランペットの旋律がこの曲の最も重要な鍵となっており、ドラムを中心として規則正しいテンポで演奏することにより爽やかで力強い楽曲をつくりあげる。

[トランペット2, ドラム, 鉄琴, 木琴, ピアノ, ベースギター, エレキギター, ウィンドバーチャイム, クラリネット, オーボエ]

わらべ唄……① 花いちもんめ (合唱)

大正時代の遊び唄であるが、現在も歌いつがれており、友だちをトレードするためのジャンケン唄の中に織り込んでいる。この編曲には実際ジャンケンのフレーズが書かれており、学生2人(男・女)が列の前に飛び出し、ジャンケンを行う場面を設けた。これらの遊びの動きをより一層効果的に見せるために、実際では向かい合わせのあそびを、舞台の上では、歌いながらの横2列を前・後の動きで表現している。⁽¹⁾



また振り付けは遊びを表現できるように十分な工夫をしている。伴奏はピアノで、途中トランペットのオブリガートが入る。[ピアノ、トランペット]

② 3つのわらべうた（合唱と楽器演奏）

1. ずいずいずっころばし

[ピアノ、トランペット、クラリネット、ボンゴ（和太鼓風）、ベースギター]

2. 通りゃんせ [ピアノ、琴、歌ソロ2人]

3. あんたがたどこさ

[ピアノ、トランペット、クラリネット、ベースギター、ボンゴ（和太鼓風）]

これらの3つのわらべ唄はすべて斉唱での合唱である。軽快な唄には振り付けをつけ、ゆっくりとしたテンポの通りゃんせには、合唱と歌のソロ2人との掛け合いで「語り合い」を表現し、さらに琴によってメロディーを奏することで、日本の伝統音楽を強調する。

民謡等 ……………① さくら（アンサンブル演奏）

日本のもっともよく知られる伝統的古曲であるので、できるだけオリジナルに近い形で編曲を試みた。また琴という日本伝統楽器を最大限に強調しつつ、西洋の楽器とのコンビネーションをバランス良く行うことで比較的現代風に表現する。

[琴、ピアノ、エレキギター、木琴、鉄琴、オーボエ、トランペット]

② 木曾節（アンサンブル演奏）

民謡としては近県で一番有名なものと考えられるので、ここにこれを取り入れた。編曲（三枝茂章氏）が非常に現代的にできており、リズムの軽快さがオリジナルよりも聴衆に受け入れられ易いと考えられる。それを、2重唱と4種類の楽器のパートに編曲しそれぞれの担当に長けた学生同士が演奏を行った。

[男性2重唱、ピアノ、和太鼓（コンガを使用）、クラリネット、オーボエ、トランペット、アルトサククス]

③ 島唄（アンサンブル演奏とアンサンブルメンバーによる合唱）

近年沖縄の音楽は研究が進むにつれ、大変注目を集めている。この島唄もその影響で色々な形にアレンジされ若い世代に人気を集めた。ここでは日本の沖縄が歴史と共に価値のある音楽的財産を残してきたことを学生達自身に学ぶ必要性が十分にあると考え、アンサンブル選択学生全員による演奏を行った。しかしながら戦中激動の時代に生きてきた沖縄の方々は、この島唄に決してよい印象をもつ

ているわけではなく、むしろ大変複雑な心境でこの鳥唄の反響を受け止めておられることをここに付け加えておく。

楽器は和洋折衷で、沖縄旋律を基本として西洋の和音進行で伴奏がつくられているので、さまざまな楽器の使用が可能である。また途中にはロック調のアレンジがあり色調豊かな演奏が経験できる。和太鼓のソロ、歌のソロ、琴のソロ、三味線のソロ（音色のみ）で曲のはじめを飾り、最後は楽器と2部合唱の総力を挙げての演奏となる。

[和太鼓（コンガを使用）、琴、三味線、木琴、鉄琴、オカリナ、ピアノ2台、トランペット4、トロンボーン、フルート、クラリネット2、オーボエ、アルトサククス、ドラム、エレキギター、ベースギター、ボンゴ]

唱歌・童謡……① 犬のおまわりさん（2部合唱と楽器による伴奏）

今回のプログラムの中では、保育現場で用いられることの一番多い曲であるが、童謡の域を超えることのない作品であるので、ほとんどが非常に単純な伴奏及び楽譜で出版されている。そこで今年度の楽器の種類が豊富なことを利用し、あらゆるフレーズを様々な楽器で受け持ち、単なるピアノ伴奏譜を極端にアレンジした。

また犬とカラスの鳴き声を肉声で入れて状況のイメージを膨らませるアイデアなどは彼らのセンスのみせどころである。

合唱は2部合唱で犬とネコの交互の振り付けは、より明るく楽しい雰囲気を感じさせるよう演じるためのもので、速いテンポで軽快に演奏をする。

[クラリネット、トロンボーン、フルート、ピアノ、ベースギター]

② 赤とんぼ（2部合唱と楽器演奏）

一般的な2部合唱を行う中で、楽器のオブリガートを付け、また楽器のみの旋律の演奏を挿入した。この曲は専門家でもむずかしい合唱の響きであることから考えると、彼らの技術的な欠点は当然のことながら免れない。またこの曲の性質上振り付けなどの視覚的效果を創作することは不適格である。よって楽器の重奏を合唱と同時に演奏していくことは、メロディーの美しさを強調することができる。もっとも、この奏者達は高い技術と音楽的センスを持っていないければ効果はないこととなる。

[アルトサククス、トランペット、オーボエ、ピアノ]

③ ゆき（合唱）

これもまた保育の場でよく用いられている曲であり合唱の斉唱で演

奏する。季節感がはっきりしていることから、「ゆき」をさらに「降る」という「動」の動作を振り付けることで、イメージをより明確にしていくことの効果をねらってみた。日頃の手遊びの経験などから、学生達の発想は豊かであり「ゆき」がふわふわと降って来る視覚的美しさが振り付けによって表現されている。

また鉄琴で雪の音が効果音として入る。

[ピアノと鉄琴による伴奏]

④ ふるさと（全員合唱）

昨年に引き続きエンディングにはこの曲を使用した。この曲の編曲（源田俊一郎氏）は3部合唱になっており、総勢121名が最後に終結するにはふさわしい楽曲構成である。

ソロの男子学生がアカペラで歌い始め、途中女子学生のソロも加わり一気に全員合唱へと登りつめ、何度も同じメロディーが輪唱のように繰り返される。最後は3声の和音をフォルティシモで歌い終わり、プログラムのエンディングとして非常にふさわしい曲である。このふるさとが時代を超えてこれからも永遠と歌いつがれていくことは言うまでもないであろう。

[ピアノ2台、ベースギター、木琴、鉄琴による伴奏]

このように4分野16曲はアニメ曲の数曲を除いては全て必ずどこかで聴いたり歌ったりして経験する範囲のものであろう。また「民謡など」の楽曲については音楽経験を豊かにする上においても学習の効果は十分にあると言えよう。学生達は日頃バイエルやソナチネなどの西洋音楽に触れてはいるが、さらに日本古来の音楽を知ることが、幼児への影響を考えると、貴重な体験の一つとなるはずである。

5. 総合練習の指導上の留意点

合唱とアンサンブルと別々の授業を展開してきたが、ここで全てを1つにまとめるための指導者による指導力が問われることとなる。クラスが違えば名前も知らない、また話をしないなど、近年のデリケートな心情なども影響して、学生同士のコミュニケーションは不足している。さらにクラス自体も6つに分けられて練習してきた。そのような状況の中で心情をあらわにする音楽を演ずるには、指導者の先導がかなりの影響を与えるものと考えなくてはならない。技術面以外の留意点を以下にいくつかあげることとする。

1. 総合練習に入ったら総指導者は一人に決める。（学生の迷いを招かないため、他者は補助的存在であること）
2. このプログラムのテーマをしっかりと学生達に伝える。
3. 人数が多いのでトラブルなどを聞き逃さないようにリーダーなどから常に情報を収集

する。

4. 一人一人の存在や価値など演奏を通して自覚させ、全体の中の「自分」をしっかりと意識し、大切に思えるよう導く。
5. 思いやりから生じる音楽への影響力を、具体例をもって示す。

6. 本番を迎えて

本番当日までに5回の総合練習を行った。多目的ホールという非常に音響効果の条件の良くない会場で演奏を行うことは、演奏技術の乏しい学生達にとって至難の業である。しかしながらその成果は彼らの一途な努力によって予想以上の仕上がりを見せることが出来た。

7. 結 果

最近の学生の精神状態は大変デリケートであり且つ軟弱なイメージを拭い去ることは出来ないであろう。ある教育大学で、教育実習中その実習に耐えられず自殺をした学生がいるという情報も得ている。携帯が片時もはなせず、メールの返事がすぐ来ないと不安になってしまう最近の学生の心理的傾向や、できるだけ人とのコミュニケーションをさげ、傷つくことを極端に恐れている彼らは、現代の若者の弱点を象徴している。そのような彼らが社会に出て行く寸前にこの「青い空コンサート」で、自分というものを精一杯表現できる場を与えられることは、知識面においても精神面においてもプラスとなる経験を残していくものと考えている。

学習成果については、彼らの音楽全般に対する興味の度合いが、コンサート以前とそれ以後とは明らかに違い、音楽に対しての恐怖感や嫌悪感などを持っていた学生が前向きに演奏する姿が見られるようになった。またコンサート以後、個人や少人数発表の場を設定したら、それぞれが様々な工夫を凝らし、積極的に発表を行うことができたのである。色々な楽器を演奏したり、歌や楽器のソロの演奏があったりという普段の授業では行わない状況は学生同士が大変良い刺激を与え合うことも十分証明できた。このように人の演奏を鑑賞することや、アンサンブルで発表を行う事などで、彼等同士にとって音楽的に良い影響を与えることが可能なのである。また日頃の中々成果のあがらない〈ピアノの練習に対する悪いイメージ＝音楽苦手〉の先入観を拭い去る効果があることも認めざるを得ない。

今年度初めて、「アンサンブル」を授業として実施したわけであるが、以上のことから学生一人一人にとって成果があったことは確かであろう。我々教員が日頃の音楽一般の授業では察知し切れない学生の長所や短所を、この「コンサート」を通して違った角度から彼らの可能性を見出すことは、凝り固まった音楽の方向性で学生のレベルを決め付ける危険性が少なくなるはずである。近年 医療の現場ではセカンドオピニオンが当たり前のように言われているが、音楽教育においても、音楽的レベルをピアノ実技だけで決定してしまうような従来の既成概念を捨てて、あらゆる可能性から個人の音楽的レベルを向上させるのにこの

「アンサンブル」の授業は大変意義のあるものであると考える。

8. 今後の課題

毎回の「青い空コンサート」での主な課題の一つは曲目選択についてであろう。今回の場合も幼児を対象にして考えており、今実際に歌うことのできる曲、どこかで聞いたことのある曲、就学したら学習する曲、是非覚えてほしい曲、などの観点から選曲を行っている。しかしながら、発表の形式からして幼児には“退屈である”などの生理的な問題に着眼すると、プログラムの趣旨は必ずしも方向性が正しいとは言いきれないのかもしれない。また観客の方の年代層や来場の目的が学生達の意志と必ずしも一致するものではないことも、重大な問題点となる。さらに学生達の保護者の立場と、全くの一般観客の方の立場では鑑賞に対する感覚が違っており、当然期待するものの質も違っている。

これらの様々な問題点を抱えながらも、地元地域の方々にご来場頂くことで始めて本学の学生達の発表が緊張感を持ったやりがいのあるコンサートとなることは言うまでもない。それを十分認識した上で、本来この「青い空コンサート」を何の目的で行うのかの趣旨をもう一度確認すべき必要がある。特に音楽に関しては学生達自信の満足度と観客の方のそれを完全に一致させるのは難しい。全くの幼児対象の演奏を行う場合と、広い年代層に楽しんで頂く演奏では、プログラミングや演奏の形式は別のものであるべきであろう。事実関係者の方のアンケートには「学生が自分で楽しんでいるだけでは意味がない。もっと子供達が楽しめるための音楽でないと……」というコメントが書かれていた。これはまさに観客の方と演奏側の目的意識のずれであり、はっきりとした発表の趣旨が観客側に伝えられていないことの証明である。また観客の方々の参加型か、鑑賞型なのか、これは観客の方の年齢層で必然と決まってくるものであるが、これらのあらゆる問題点を全て提起し、再度確認することが今後の最大の課題となっている。

音楽的な部分については、いつものことながら技術的な面に於いてのレベルアップが少しでも可能となるような指導方法を目指しているが、彼らのレベルの幅の広さに戸惑いを隠せないことも事実である。前記した〈観客の対象〉の問題と共にどのような音楽的レベルアップをめざすのか深く考察していかなければならないと考える。

また、例年学生同士の間人間関係に最善の注意を払って指導を行っているが、今年度の学生にそのような個別的な人間関係のトラブルは、特別には見られなかった。各年の学年カラーは当然あり得るが、昨年度までの授業外によるレッスン制と正規の授業とした今年度のスタイルの違いが、学生にどのような心理的違いをもたらすのかが興味の対象ではないかと考えている。これに関しても調査を続け、次回に報告する。